宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

学校体育活動(ダンス)における複数の指導者による効果的な指導の在り方調査研究(中間報告)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野邊, 麻衣子, 豊福, 彬文, 石本, 愛, 今村, 直也, 河村, 康秀, 西田, 英司, 丸岩, 貴和, 横山, 知子, 吉永, 尊昭, 堀内, 順一, 高橋, るみ子, Nobe, Maiko, Toyofuku, Akifumi, Ishimoto, Ai, Imamura, Naoya, Kawamura, Yasuhide, Maruiwa, Takakazu, Yokoyama, Tomoko, Yoshinaga, Takaaki, Horiuchi, Junichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5392

宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要　第23号，91－105，2015

学校体育活動（ダンス）における複数の指導者による効果的な指導の在り方調査研究（中間報告）

野邊麻衣子*・豊福彬文**・石本愛***・今村直也****
河村康秀*****・西田英司******・丸岩貴和*******・横山知子********
吉永尊昭*********・堀内順一**********・高橋るみ子**********

Interim Report- A research survey of the state for effective guidance by some leaders on school physical education activities（Dancing）

Maiko NOBE*, Akifumi TOYOFUKU**, Ai ISHIMOTO***, Naoya IMAMURA****, Yasuhide KAWAMURA*****, Eiji NISHIDA******, Takakazu MARUIWA*******, Tomoko YOKOYAMA********, Takaaki YOSHINAGA*********, Junichi HORIUCHI**********, Rumiko TAKAHASHI**********

1．はじめに

本研究は、文部科学省スポーツ・青少年局の企画競争を前提とする公募「学校体育活動における指導の在り方調査研究」（平成26年４月９日）に参加し、学校体育振興事業技術審査委員会の審査を経て実施するものである。

事業の趣旨は、各地域・学校における指導状況や「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果等から、現在の学習指導要領のもと、学校体育活動を推進する上で全国的に課題等と考えられる事項についての要因・背景、改善方策、指導方法等の工夫改善の在り方を、教育委員会、学校、大学、関係団体等と連携しつつ実証的に研究を行い、その成果について次期学習指導要領改訂、各地域・学校等での取組や指導の工夫改善、指導者の育成等において活用を図ること、である。

平成26年度は、平成25年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査を踏まえた７つのテーマが事業内容として示されている。本研究は、その内の「③小学校における専科教員の効果的な活用の在り方、小・中学校における複数の指導者（外部指導者などの指導補助者を含む）による効果的な指導の在り方」（の後半）を選択し、県内の小中学校等の協力を得つつ実証的に調査研究を行うものである。

なお、本研究の実施期間は、原則平成26年度である。

*宮崎大学教育文化学部附属小学校
**NPO法人MIYAZAKI　C-DANCE CENTER
***日向市立平岩小中学校
****日南市立油津小学校
*****都城市立石山小学校
******宮崎大学教育文化学部附属中学校
*******日南市立細田中学校
********宮崎市立住吉小学校
*********小林市立須木小学校
**********宮崎市立檍北小学校
**********宮崎大学教育文化学部

2．調査研究の目的・内容

2－1　応募の背景

学校体育活動において、“演示”のできる指導者は、子供たちに運動のイメージをもたせることができるだけではなく、自分が行うべき事柄に対して一つの理想をもたせることができると言われている。しかし、担任が全科目を教える小学校の場合、担任に対し、子供たちに運動のイメージをもたせることができるような演示を求めることは難しい。またそれは、専科の教員にも当てはまることで、専科（体育・保健体育）の教員だからといって全領域の運動が得意なわけではない。その中でも、美的創造的運動を取り扱う領域「ダンス」（小学校低学年は「表現リズム遊び」、中・高学年は「表現運動」。以下、これらを総称して「ダンス」という。）の演示が“苦手”という教員は、小学校、中学校を問わず多い。

この学校体育の問題と、完全必修化となった中学校「ダンス」に存在する問題（外部指導者に任せきりで授業との連動性がない取組、児童生徒の実態と乖離した取組、単純に児童生徒に振り付けをして踊らせたりするだけのもの、等）の二つが、今回の企画競争を前提とした公募に参加した背景・動機である。

なお、本研究における「外部指導者」とは、いわゆる「部活動で顧問の教員を助け、専門的な指導をする人。地域住民や保護者、学生らが担う。学校が個別に依頼するほか、自治体が登録して派遣する場合もある。日本中学校体育連盟の調査では、2010年度は約１万６千人だったが、11年度は約３万人と倍増している。（2012-09-26 朝日新聞 朝刊 教育 1）」ではなく、文化庁が実施する「芸術文化による子供の育成事業」が派遣する“一流の”芸術家等[1]と同レベルの指導者である。文化庁事業では、応募の際の被派遣者（講師）の略歴書に、専門分野に係る主な賞歴等を記載する。同じく、実施希望調書に教育課程への位置づけ（総合的な学習、教科、特別活動、その他）を記載する。そこで本研究では、大学教員（教科教育・教科専門）等で構成する派遣芸術家選定委員会において「審査・承認」された「外部指導者」と担当教員による学校体育活動を調査研究の対象とした。

2－2　研究の目的

本研究の目的は、「学校ダンス」の授業における複数の指導者（外部指導者などの指導補助者を含む）による指導の効果を調査し、「学校ダンス」における外部指導者（芸術家等）の積極的・効果的な活用の推進を図ることである。その目的を達成するために、地域の教育委員会、NPO法人、学部附属教育協働開発センターと連携・協力し、以下に示す課題を解決する。

---

[1] 文化庁「文化芸術による子どもの育成事業」（平成26年度～）の前身「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」（平成23～25年度）の被派遣者は「当該分野において優れた活動を行っている芸術家」（実施要綱、平成23年４月１日文化庁長官決定、平成23年６月一部改正）であり、さらにその前身の「子どものための優れた舞台芸術体験事業」では「一流の芸術家の派遣による講話、実技披露、実技指導を体験することにより（省略）」と明記され、「被派遣者の人選は、開催地の都道府県教育委員会、政令指定都市、政令指定都市教育委員会のいずれか又は複数からの推薦を受け、文化庁長官が決定する」（実施要項（案）平成14年４月１日文化庁長官決定、平成19年、20年、21年、22年一部改正）となっている。

＜課題１＞　複数の指導者の授業を評価するためのアンケート（インタビュー内容も含めて）を作成・実施する。

＜課題２＞　外部指導者の「やりやすさ」「やりにくさ」を判断する規準を統一するために、全ての実践校に同じ芸術家を派遣する。

＜課題３＞　学びの「深まり」を判断する規準を統一するために、授業アドバイザーが全ての実践校で参与観察を行う。

＜課題４＞　複数の指導者による授業の評価規準を作成する。

＜課題５＞　新規実施校の開拓と外部指導者を発掘するために、授業記録（映像）を作成し、それを公開フォーラム等で上映する。

＜課題６＞　他領域における外部指導者の積極的な活用を図るために、調査研究の成果（検証した評価規準の活用方法等）を次年度の日本体育学会、日本体育科教育学会等で報告できるよう準備する。

２－３　研究の方法

研究期間中に、以下の方法を用いて調査研究を行う。

ア）授業アドバイザー（高橋）が全ての実践校（46校）において参与観察を行い、児童生徒の学びの深まりを明らかにする（５段階評価）。

表１　芸術家の知を生かした芸術教育（ダンス）の内訳
※未実施校（10校）も含む

事業名	小学校（　）県外	中学校（　）県外	小中学校（　）県外	特別支援学級	備考（県外）	合計
文化庁 NPO提案型	20	8	2	1		31
文化庁 学校公募型	3	3（1）	0	0	東京都	6
文部科学省 コミュニケーション	1	1	1	0		3
科研費 コミュニケーション	2	0	0	1		3
アウトリーチ事業 他	3（2）				いわき市	3
合計	29	12	3	2		46

イ）外部指導者（んまつーポス）が、各実践について、担当教員との連携も含めた「やりやすさ」「やりにくさ」を明らかにする（５段階評価）。併せて、んまつーポスが、「やりやすさ」「やりにくさ」を何で判断したかについて明らかにする。

ウ）ア）とイ）の結果から、んまつーポスの「やりやすさ」「やりにくさ」とアドバイザーの評価を構造的に分析し、以下のように分類する。

第一象限　外部指導者が「やりやすい」・学びが「深まった」実践校　（Ⅰ群）
第二象限　外部指導者が「やりにくい」・学びが「深まった」実践校　（Ⅱ群）
第三象限　外部指導者が「やりにくい」・学びが「深まらない」実践校（Ⅲ群）
第四象限　外部指導者が「やりやすい」・学びが「深まらない」実践校（Ⅳ群）

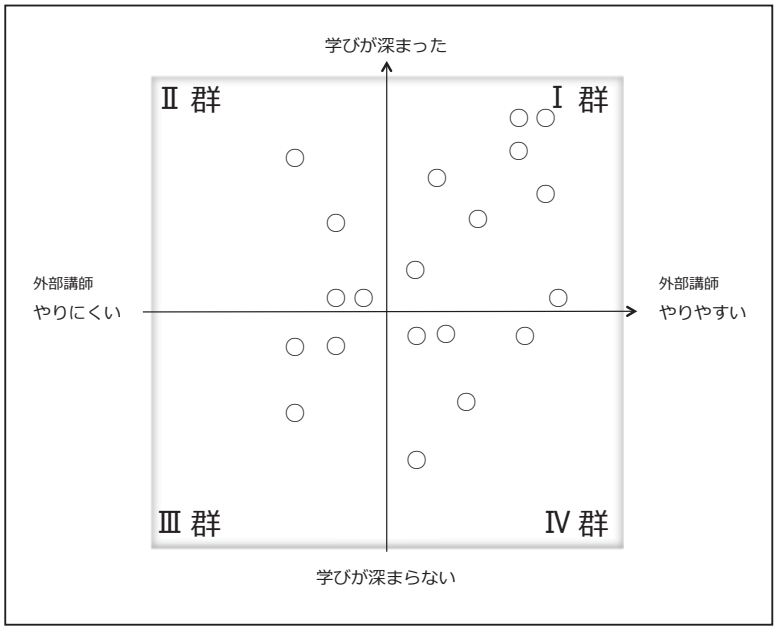


図１　外部指導者の「やりやすさ」「やりにくさ」と実践評価のマトリックス図の例
（作図：豊福）

エ）作成する評価規準（後述）を用いて、Ⅰ群及びⅡ群に属する学校の事後アンケートから、児童生徒の学びの深まりについて、客観的根拠を抽出する。

オ）実践を３つのモデル（ａ　んまつーポスとダンスを専門とする教員の連携、ｂ　んまつーポスとダンスを専門としない体育専科及び保健体育教員の連携、ｃ　んまつーポスと、ａ及びｂに該当しない教員の連携）に分類し、以下の４つの観点から、「複数の指導者による効果的な指導の在り方」について明らかにする。

＜観点１＞　「複数の指導者による効果的な指導の在り方」に対する担当教員とんまつーポスの考え方のズレ（担当教員及び外部指導者の事後インタビュー）
＜観点２＞　んまつーポスの紹介の方法（担当教員の事後インタビュー）
＜観点３＞　「複数の指導者による効果的な指導」に対する期待感（担当教員）等の変容（担当教員の事後インタビュー）
＜観点４＞　学びが深まった（Ⅰ群及びⅡ群に分類した）実践の単元学習（導入・展開・終末）における位置づけ（担当教員の事後インタビュー）

カ）教員養成学部の知を生かして、学校体育活動における外部指導者（芸術家など）の積極的・効果的な活用の課題について、多面的に明らかする。

２－４　研究の特色

本研究のアイデア・特色は、以下の６点である。

1．NPO法人 MIYAZAKI C-DANCE CENTER（以下、「MCDC」という。）がコーディネートする平成26年度「文化芸術による子供の育成事業（芸術家の派遣事業）」に相乗りして実施する。以下にそのメリットを示す。
   1）教員養成学部の知を生かして多面的に本研究に取り組むことができる。
   2）学部附属教育協働開発センター、地域の教育委員会、NPO法人等と連携・協力して外部指導者の派遣先を募集・決定することができる。
   3）すでに、実施予定校のニーズに合わせた外部指導者が審査・承認されている。体育、保健体育の場合は、宮崎県の「武道等指導者等派遣事業」（平成23、25年度）の派遣指導者、文部科学省事業（平成23、24、25年度）及び文化庁事業（平成22、23、24、25、26年度）の派遣芸術家の「んまつーポス」が承認されている。
   4）教育協働開発センターが開催する公開フォーラムで、本調査研究についても外部評価を受けることができる。
   5）外部指導者を派遣するための経費が予算化（各実践校につき１回分）されている。
2．外部指導者と担当教員との“連携”を前提としている（外部指導者に任せきりにしない。担当教員はディレクター、外部指導者の講話・実技指導・実技披露は「生きた教材」である）。
3．外部指導者の「やりやすさ」「やりにくさ」とアドバイザーの評価から構造的に分析する。
4．全国的な学校体育活動における指導の工夫改善に寄与させるために、他県の小・中学校においても複数の指導者による効果的な指導の在り方を探る調査研究を行う。今年度の実施がすでに決定している学校は、いわき市（２校）、東京都（１校）である。なお、派遣する外部指導者（んまつーポス）の謝金、旅費等については別途予算化されている（いわき芸術文化交流館アリオス平成26年度アウトリーチ事業、平成26年度文化庁事業、多治見文化会館平成26年度アウトリーチ事業）。
5．調査研究が、新規実施校の開拓及び外部指導者の発掘を兼ねている。
6．次期学習指導要領の改訂に向けた調査研究である。「鑑賞」が学習内容に位置づいている音楽や美術のように、体育、保健体育の学習にも「観る活動」（「ダンス」の場合は「鑑賞」）を取り入れ、豊かなスポーツライフの実現を図る。そのために、「観る活動」（演示）の効果を中心に、外部指導者（専門家）と担当教員の効果的な指導を単元学習のどこに位置づければ、教材（外部指導者の講話・実技指導・実技披露）の有効性を引き出すことができるか、カリキュラムを示す。

3．調査研究の方法

3－1　研究体制

本研究に携わる団体とその役割について、平成26年度「小・中学校の学校体育活動における複数の指導者による効果的な指導の在り方調査研究体制及び組織図」（資料１）に、黒で示した。（薄いグレー色は、相乗りする平成26年度文化庁事業）。

3－2　研究計画

1）　申請書の作成（2014年４月）
2）　教育委員会、他（挨拶、趣旨説明）
3）　評価規準及びアンケートの作成
4）　実施校決定（９月）
5）　事前打ち合わせ　※インタビューを含む
6）　各授業の参与観察及び収録、インタビュー
7）　作文の分析（～３月）
8）　検証及び評価（～３月）
9）　授業記録（映像）の編集（２月）
10）　外部評価（2014年12月）及び学会報告（2015年）
11）　報告書の作成及び提出（３月）

4．調査研究の結果（中間報告）

本研究（中間報告）では、2014年度内に実施した小学校18（Ａ校～Ｒ校）及び中学校８（Ｓ校～Ｚ校）にいわき市の小学校２校を加えた28校を分析対象校とした。

まず、学校種別に、外部指導者の「やりやすさ」「やりにくさ」とアドバイザーの評価を構造的に分析した。（図２、３を参照）

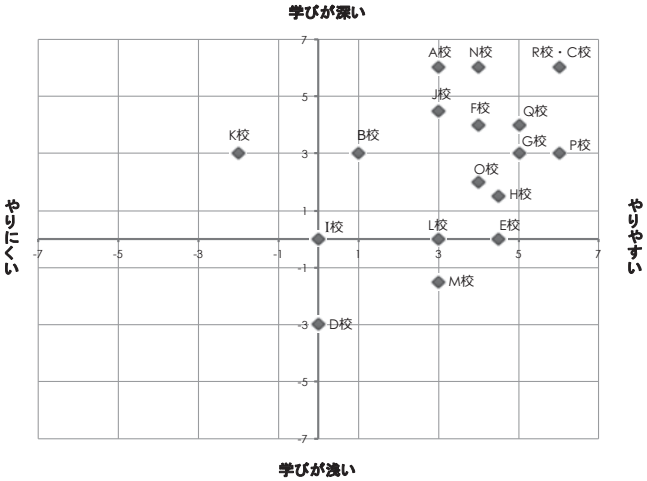


図２　外部指導者の「やりやすさ」「やりにくさ」と実践評価のマトリックス図（小学校）
（作図：豊福）

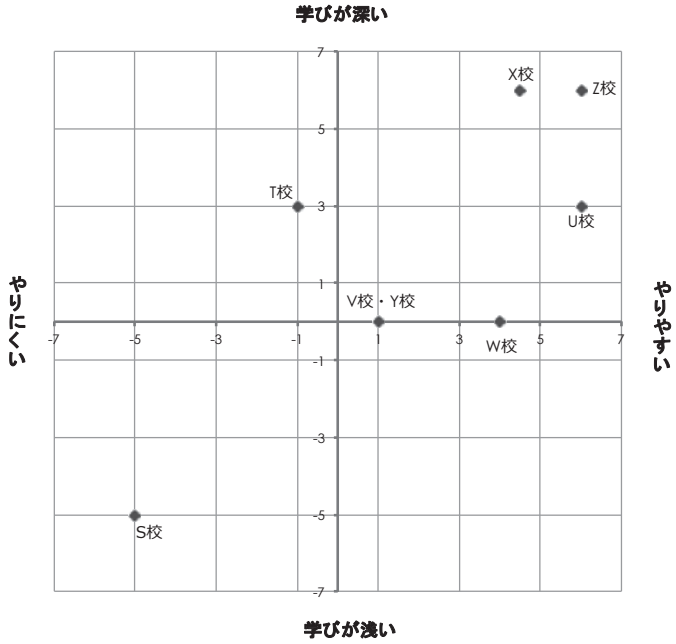


図３　外部指導者の「やりやすさ」「やりにくさ」と実践評価のマトリックス図（中学校）
（作図：豊福）

学びの深さを評価するために、参与観察を行い、併せて児童生徒の事後アンケート（自由記述）を用いた。なお、事後アンケートについては、本研究のために作成した学びの深さの評価規準（表２）を用いて図４のように分析した。

表２　「学びの深さ」の評価規準

レベル	評価規準	記述例
①	学習活動の感想を中心に自己評価している。	「楽しかった。」「おもしろかった。」「～が分かった。」「～できた。」「～できなかった。」　等
②	学習のねらいや外部指導者との違いなどを自己の能力と照らし合わせて、自己評価している。 ※自己の成長の気付き、疑問、実感など	「自分は～だった。」「～をしていなかった。」「～の○○ができるようになった。」　等
③	②の理由について、分析的に考えている。	「○○ができたのは、△△のおかげだ。」「◇◇の練習はとても効果的だった。」　等
④	③に加えて、自分の課題を焦点化して具体的な活動目標の設定に役立てている。	「～だから、○○しよう。」「○○なことができるといいと思う。」　等
⑤	④に加えて、その課題の具体的な解決方法を考えている。	「・・・。そのためには○○しよう。」　等

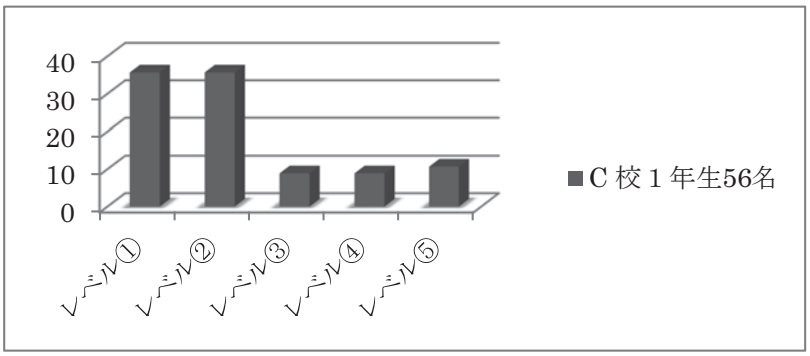


図４　事後アンケート（自由記述）の分析の例（作図：高橋）

次に、「んまつーポス」のインタビュー（事後）から、「やりやすさ」「やりにくさ」を何で判断しているかを探った。その結果、「んまつーポス」は、回数、時間、対象、人数、学習者の体験、打合せ等の観点（以下、「実施条件」という。）から判断していたことが明らかとなった。

そこで、学びの深さとやりやすさについて、高橋とんまつーポスが高く評価した実践（いわき市立大野第二小学校）を点数化し、それを基準（表３）に学校種ごとの実施条件得点表（表４、５）を作成した。

表３　実施条件得点表（基準：いわき市立大野第二小学校）

	☆ 7ポイント	◎ 5ポイント	○ 3ポイント	△ 1ポイント
回数		2回以上	2回	1回
時間		90分以上	90分 （100分）	45分 （50分）
対象		全校	単学年	異学年
人数		～50名	51～100名	101名～
学習者の体験		生の鑑賞	映像による鑑賞	体験なし
打ち合せ	担当者全員	指導者 （代表）	責任者	電話・メール

表４　分析対象校の実施条件得点表（小学校）

	学校名（小学校）	回数	時間	対象	人数	体験	打合せ	ポイント
1	いわき 大野第二小	○	○	◎	◎	○	◎	24
2	A 校	△	○	○	◎	○	◎	20
3	B 校	△	○	△	○	○	◎	16
4	C 校	△	○	○	○	○	☆	20
5	D 校	△	○	○	△	○	◎	16
6	E 校	△	○	○	○	○	◎	18
7	F 校	△	○	◎	◎	○	△	18
8	G 校	△	○	◎	◎	△	◎	20
9	H 校	△	○	○	◎	○	◎	20
10	I 校	△	○	△	○	◎	○	16
11	J 校	△	○	○	◎	◎	○	20
12	K 校	△	○	△	◎	◎	◎	20
13	L 校	△	○	○	△	○	◎	16
14	M 校	△	○	○	○	◎	△	16
15	N 校	○	○	○	◎	◎	○	22
16	O 校	△	○	○	◎	○	◎	20
17	P 校	△	◎	○	◎	○	◎	22
18	Q 校	△	◎	○	○	△	◎	18
19	R 校	○	△	○	○	◎	☆	22
20	いわき 好間第四小	○	◎	◎	◎	○	○	24

表５　分析対象校の実施条件得点表（中学校）

	学校名（中学校）	回数	時間	対象	人数	体験	打合せ	ポイント
	いわき 大野第二小	○	○	◎	◎	○	◎	24
1	S 校	△	△	△	△	△	○	8
2	T 校	△	○	◎	◎	○	◎	22
3	U 校	△	◎	○	○	◎	◎	22
4	V 校	△	○	◎	○	◎	◎	22
5	W 校	△	△	○	◎	○	◎	21
6	X 校	△	○	△	◎	◎	◎	21
7	Y 校	△	△	○	◎	○	◎	18
8	Z 校	○	○	◎	○	◎	◎	24

その結果、分析対象校の実施条件得点表（表４、５）における高得点の学校（小学校は、Ｒ校、Ｃ校、Ｐ校、Ｎ校の４校。中学校は、Ｓ校、Ｙ校を除く６校。）の内、小学校は３校が、外部指導者の「やりやすさ」「やりにくさ」と実践評価のマトリックス図（図２、３）のＩ群に属していた。また、中学校は５校がＩ群に属していた。以上のことから、芸術家のやりやすさと「実施条件」（客観的）の関係性が明らかとなった。同じく、学びの深さと「実施条件」（客観的）の関係性が明らかとなった。

そこで、学びの深さと「実施条件」の関係性をさらに詳しくみるために、「実施条件」が類似する学校（Ｊ校、Ｉ校、Ｄ校）を抽出し、学びの深さと「実施条件」の関係性を探った。（表６）

抽出したＤ校とＪ校は、人数が大きく異なる。同じく抽出したＩ校とＪ校は、Ｄ校ほど人数の差はないが、単学年と複数学年の違いがある。

表６　分析対象校（Ｊ校、Ｉ校、Ｄ校）の実態

	学校名（小学校）	学年	回数	時間	人数	芸術家と学校の関係（鑑賞教室）	打合せ	ポイント
5	Ｄ校	１年	１回	90分	111名	DVD	責任者	16
10	Ｉ校	１.２年	１回	90分	65名	スクールコンサート	責任者	16
11	Ｊ校	１年	１回	90分	22名		責任者	20

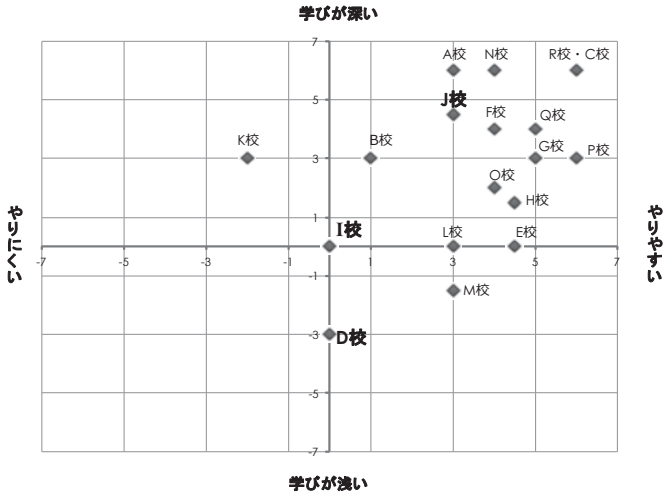


図５　分析対象校（Ｊ校、Ｉ校、Ｄ校）の「学びの深さ」（作図：豊福）

図５のように、分析対象の３校は、学びの深さに差がある。そこで、分析対象とした３校の事後アンケートから、児童の学びの深まりについて、客観的根拠を抽出した。（図６～12を参照）

① 声をだしたり、体をつかったりしながら自分の気持ちなどを表すことが好きになりましたか。

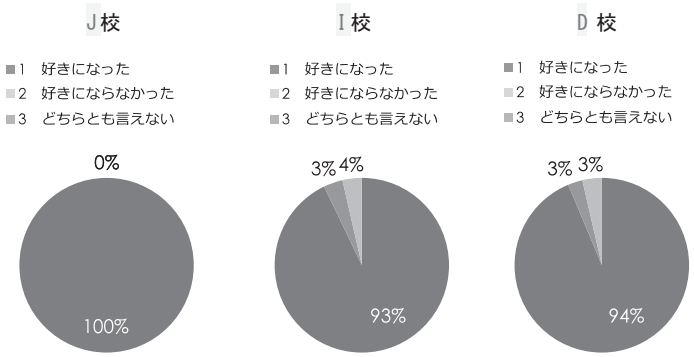


図６　分析対象校についての事後アンケート調査結果①（作図：豊福）

② いつもとはちがう友達の変化に気がつきましたか。

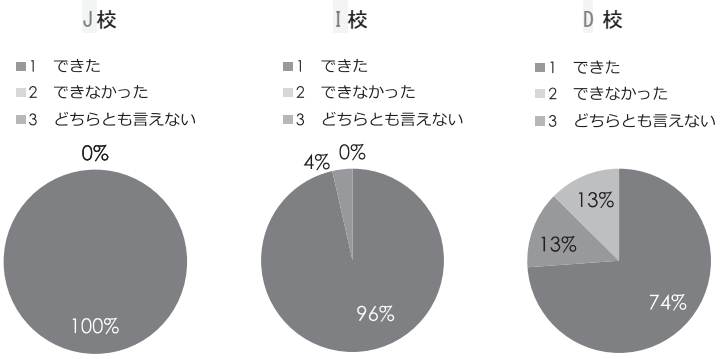


図７　分析対象校についての事後アンケート調査結果②（作図：豊福）

③ みんなと力を合わせて取り組むことは楽しかったですか。

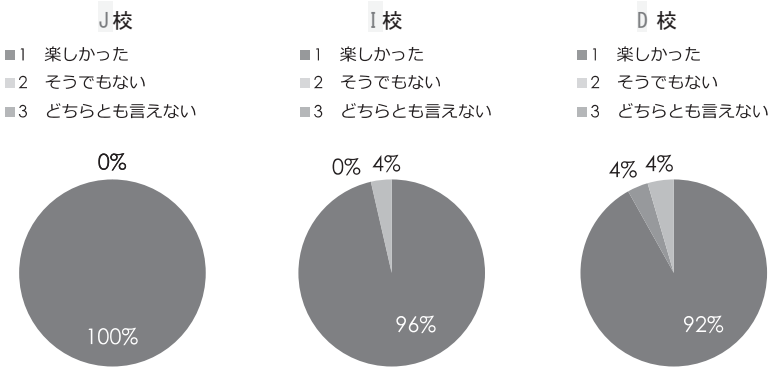


図８　分析対象校についての事後アンケート調査結果③（作図：豊福）

④　自分から進んで周りの人に話しかけるようになりましたか。

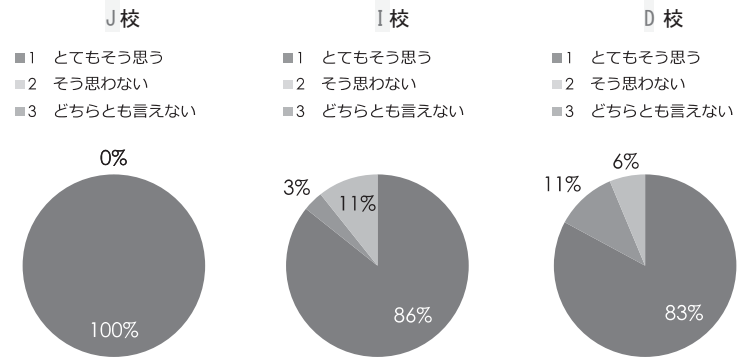


図９　分析対象校についての事後アンケート調査結果④（作図：豊福）

⑤　あなたはダンスを踊るのが、より好きになりましたか。

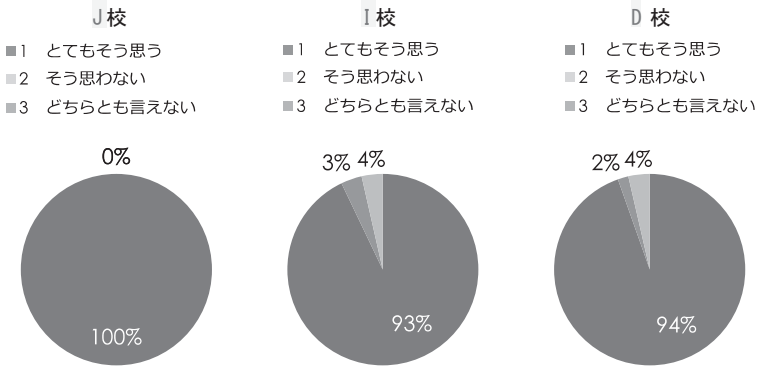


図10　分析対象校についての事後アンケート調査結果⑤（作図：豊福）

⑥　今回のような学校の先生以外の先生の授業をまた受けてみたいと思いますか。
当てはまる番号を１つ〇で囲んでください。

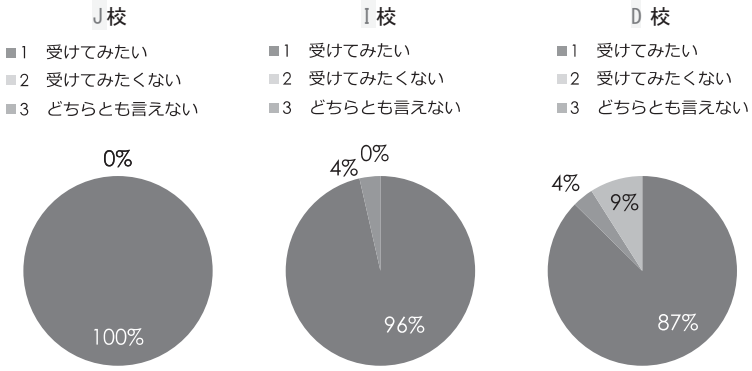


図11　分析対象校についての事後アンケート調査結果⑥（作図：豊福）

⑦　最後にお聞きします。あなたは体育が好きになりましたか。

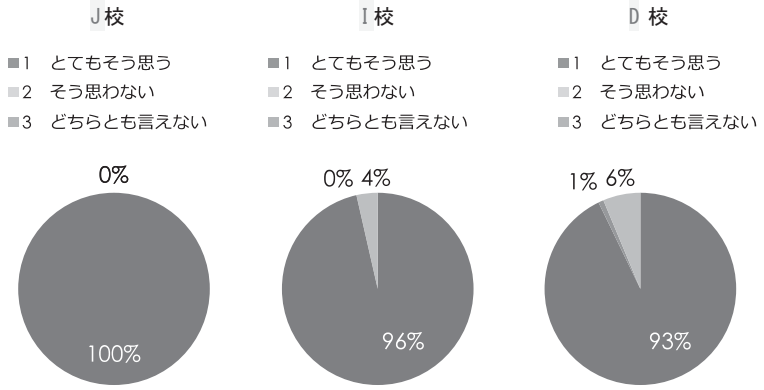


図12　分析対象校についての事後アンケート調査結果⑦（作図：豊福）

5．おわりに（中間報告）

学校ダンスに限らず､外部指導者と担当教員が連携した効果的な指導を複数回重ねることで、子供たちへの指導の効果を高めることができる。しかし､たった１回の体験であったとしても、授業を構築していく担当教員全員と外部指導者との「打ち合わせ」の実施や、指導対象となる「人数」を50人以下にするなどの実施条件を整えることで、指導の効果をより高めることができることは、前述までに明らかにした通りである。これまで漠然としていた外部指導者との指導の在り方に、一つの指標を示すことができたのは本研究の大きな成果の一つである。この指標を活用した外部指導者と担当教員による効果的な指導の取組が、広く図られることを期待したい。

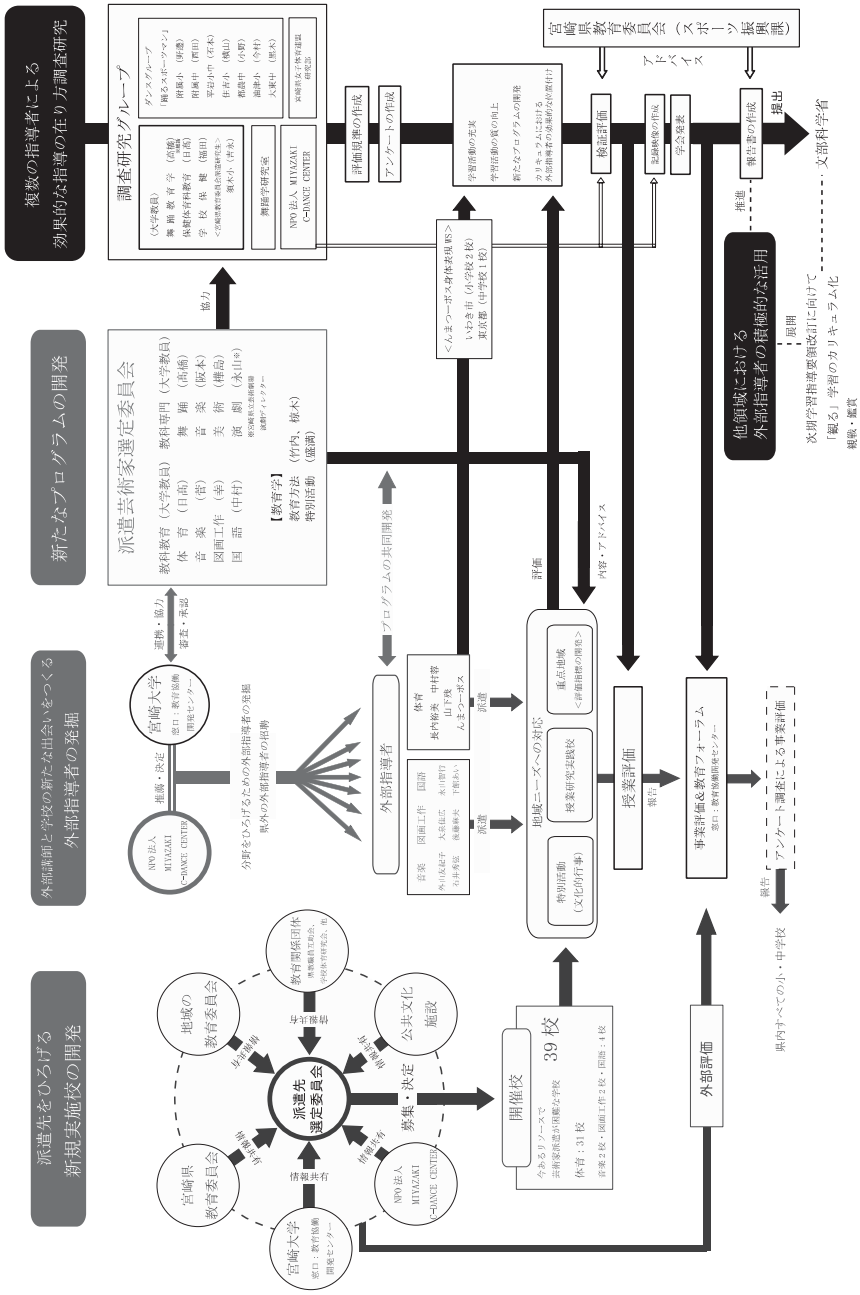
最後に、本研究を進めていく中で、外部指導者と担当教員との“連携”の捉え方についての大きな気付きについて触れたい。前述の研究動機でも取り上げた、中学校ダンスに存在する問題の一つに「外部指導者に任せきりで授業との連動性がない取組」とあるように、“外部指導者に任せきりにしない”授業を前提として研究を進めてきた。しかし、本研究の分析対象校で行われた授業のほとんどが、“外部指導者に任せきり”の授業であった。言い換えると、外部指導者に”任せきりにした”授業ではなく、外部指導者に“任せきりのある”授業であったと言えるであろう。“任せきりのある”授業とは、授業のディレクターである教員が、外部指導者という生きた教材を、生きた教材そのものとして扱うということである。つまり、外部指導者の講話・実技指導・実技披露を、外部指導者のやりたいようにさせる授業を仕組む。中学校ダンスに存在する問題「外部指導者に任せきりで授業との連動性がない取組」の“任せきり”という部分が、実は効果的な指導を生む鍵となることは、大変興味深い気付きであった。

また、授業実施後の担当教員の感想の中に、「（本授業が）単発で終わってしまった」「（単発で終わらせるのは）もったいない」といった記述が複数見られた。これらの感想から、たった１回の外部指導者との授業を、子供たちの向上的変容を見出すことができた効果的な指導として評価していることが伺える。一方で、１回しかない授業を何とか生かしていきたいという期待感とともに、教育課程の中でどのように捉えればよいのか、どう生かしていけばよいのか分

からないというような担当教員の困り感も受け取れる。実はここに、外部指導者に“任せきりのある”授業を意味あるものとできるかどうかの重要なヒントが隠されていた。授業の前後と連動性のない、一過性のイベント的な取組にしてしまうのではなく、学校ダンスの単元学習に明確に位置付け、子供たちの単元目標の到達に資する重要な一時間とすることが、外部指導者との効果的な指導には不可欠な要因である。これまでの実施校との打ち合わせでは、外部指導者との授業をどのように捉えるのかについては、担当教員のみの知るところとなっており、特に話し合われることはなかった。しかし、「意図をもった単元学習への位置づけ」が、今後の実施校においては重要な実施条件の一つであり、単元学習というまとまりの中で外部指導者との授業を行うという共通理解を図ることが、効果的な指導をよりよくしていくことに繋がるのである。さらに、単元学習のどの段階に位置づければより効果的な指導となるのかについては、今後の調査研究において明らかにしていくことで、複数の指導者による効果的な指導の在り方のモデルを示すことができると期待している。

外部指導者との指導をより効果的なものにするのか、イベント的なものにしてしまうのかは、一流の指導者という“本物の魅力”を担当教員が感動することができるか、自分が探してきた“教材の力”を信じることができるかにかかっているのかもしれない。

6　参考文献

1）文化芸術による子供の育成事業 -芸術家派遣事業- 募集案内、平成27年度学校申請分、文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室
2）平成26年度 文化芸術による子供の育成事業 -芸術家派遣事業-〈特定非営利活動法人等実施分〉実施の手引き（特定非営利活動法人等団体用）、文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室
3）平成26年度 児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験（芸術家派遣）実施の手引き〈コーディネーター用〉、文部科学省初等中等教育局教育課程課
4）平成25年度 次代を担う子どもの文化芸術体験事業 -巡回公演事業・派遣事業- 実施校募集案内、文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室、2012、11
5）「子どものための優れた舞台芸術体験事業」実施要綱（案）
6）「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」実施要綱
7）小学校学習指導要解説体育編、文部科学省、平成20年８月
8）中学校学習指導要解説保健体育編、文部科学省、平成20年９月
9）大谷みどり 築道和明、「小学校外国語活動におけるALTの活用の在り方に関する基礎的な研究 -ALTに対する予備的調査を通して-」、島根大学教育学部紀要（教育科学）第43巻、21頁～29頁、2009、12
10）高橋るみ子 福島裕子 中倉信博 野邊麻衣子 外薗武志 児玉孝文 豊福彬文、「小中一貫教育支援：芸術家を活用したダンスの授業づくり」、宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要20号、2012、3
11）苅宿俊文、「ワークショップと学び１ まなびを学ぶ」、東京大学出版会、2012、4
12）高橋るみ子、「ワークショップ型で輝くダンスの授業」、体育科教育、大修館書店、40頁～43頁、2014

資料１　平成26年度 小・中学校の学校体育活動における複数の指導者による効果的な指導の在り方調査研究体制組織図（NPO 法人 MIYAZAKI C-DANCE CENTER がコーディネートする平成26年度「文化芸術による子供の育成事業（芸術家の派遣事業）」の相乗り）